



【苫小牧市】

苫東・和みの森運営協議会

【報告者】



上田融さん



全国植樹祭から全国育樹祭へ

素人の集まりが、12年間森づくりをやったらどうなったか

「苫東・和みの森」は、第58回全国植樹祭(2007年)の開催跡地につけられた名前です。以来12年、私たちの協議会がこの場所を管理運営してきました。

12年前、コンビナート誘致が頓挫した跡地に初めて植樹したばかりの場所で、森どころか、エンピツのように細い苗木が並ぶ茫洋とした風景の前に、啞然とした憶えがあります。まして僕たちは森づくりに関してはシロウト。当初は公的補助もなく、「ここで何をしたら?」「苗木の手入れとか草刈りなんてどこが楽しいの?」という会話ばかりで、ときめく感じは全くありませんでした。それでもアクセス道沿いにかろうじて雑木林があり、蚊が多いヤブ同然の状態でしたが、まずはこの場所で活動始めることにしました。以前から親子を対象に「自然学校」の活動をしていたので、「森のようちえん」「プレーパーク」をキーワードに掲げました。親子連れがひんばんに来るようになるにつれ、ヤブの鬱蒼さがだんだん消えていったのです。これは発見で、それからは林の手入れの一環として、子どもたちにここに来てもらうようになりました。

子どもたちは、単に遊ぶというより、大人たちと一緒に、同じように働くのを「遊び」と感じているように見えます。大人がかぶるヘルメットをかぶり、大人が使う道具を使ってみる。それが楽しくて仕方ないようなのです。もちろん安全には気を配りつつ、大人はそんな子どもたちの「働き」を、「みんなが手伝ってくれて助かる」などと言いながらコーヒーカップを片手にのんびり眺めているだけ、という時間もあります。

林がこうして実に快適な空間に変わり、毎月1回、みんなでお弁当を持って集まる場になりました。もともと勇払原野の一角です。平坦地なので小さい子供連れの家族がそこそこ遊ぶにはうってつけで、この地域が実は「親子に優しい土地柄」であることにも気づかされました。

若い世代につなげていく

こんな活動を12年も続けると、幼稚園児だった子ども中高生になります。今では僕らより上手にチェーンソーの目立てをする子がいます。幼稚園児の付き添いで参加し始めたお母さんたちも、最初は「虫はイヤ」「川で濡れたくない」と言う人もいたのに、気がつけば事務局で経理を担当したり現地活動のマネジャーを引き受けたり、主体的に参加しています。「私たちの主戦力は子どもとお母さん」と言っても過言ではありません。

協議会事務局に派遣されてきた苫小牧市域おこし協力隊員で、当時大学4年生だった八木一馬さんは、今では全国でも珍しいホースロガー(馬搬手)としてこの森で活躍しています。材木を搬出するのに馬搬の専門家を招いていた時期もあったのですが、活動を始めて12年経ったら、自前でホースロギングできるまでになったのです。こうした成果を還元したいと思って、年に数回、札幌の小中学校の宿泊体験学習を受け入れています。植樹祭から12年が経ち、ちょうど間伐期を迎えています。どれもがだれかが植えた大切な木ですから、児童・生徒たちに手伝ってもらいながら丁寧に間伐して薪や木炭に加工しています。最近、この森の活動を知った人たちから「うちの森でもやりたい」「活動するために幼稚園で森を買った」といった声が届くようになりました。「幼児が遊べば遊ぶほど良い森になる」、そのノウハウをまとめたテキストをPDFにしてホームページで提供しています。

今年秋にはここで第40回全国育樹祭が開かれます。「アフター育樹祭」を見据え、公共性を保ちつつビジネスにもつなげて自立性を保ちたい、と考えているところです。

